グラフィティの境界性
――千葉県木更津市の「おっさんシール」にみる芸術と違法の二項対立――

社会学部現代社会学科　2022049
指導教員　川瀬　由高
氏名　遠山　海斗

要旨

千葉県木更津市には、正体不明のステッカーである「おっさんシール」が存在する。このステッカーはグラフィティ文化の一環として特異な位置づけを持ち、想像力を媒介として地域社会に影響を与える存在である。

本稿は、おっさんシールが生み出された背景について、グラフィティ文化の文脈に位置づけながら考察することを目的とした論文である。具体的には、グラフィティの境界性や社会への影響、芸術的評価に焦点を当て、木更津市のグラフィティデータを通じておっさんシールが地域社会へ及ぼす影響と芸術的評価について詳細に分析し、そのアートとしての位置づけと地域文化への関与について検討するものである。

Ⅰ章では、筆者の研究の背景を述べた後、バンクシーの事例から、グラフィティが芸術と落書きの境界に位置付けられる可能性を示唆する。

Ⅱ章では、グラフィティ文化に焦点を当て、その概要、歴史、文化的背景、芸術性について述べ、公共秩序との関係の考察を行う。芸術性については、グラフィティに関連したプロジェクトを事例として取り上げ、芸術的価値の可能性を検討する。公共秩序との対立においては、なぜグラフィティが違法と見なされるのかを分析し、芸術的評価基準から、グラフィティ･ライターと一般人の間にリテラシーの懸隔が存在することを明らかにする。

Ⅲ章では、おっさんシールの概要に焦点を当て、BNE との比較を通じて、おっさんシールが社会的価値と芸術性の対立を探求する要素を持つこと、グラフィティ文化内で独自の位置にあることを指摘する。また、匿名性がもたらす影響について、おっさんシールに対する聞き取り調査から恐怖感が生まれる理由について検討するとともに、これが犯罪不安社会に関連する可能性を指摘する。

Ⅳ章では、聞き取り調査から得られた情報をもとに、グラフィティ・ライターのアート活動を解明する。聞き取り調査では、グラフィティ文化でのコミュニティ内における他者との関わりの重要性、および「街ボム」と「リーガル」によるグラフィティ文化内での対立関係に基づき、ルールや考えによって成り立っていることを論じる。そして、グラフィティ・ライターがグラフィティでの行為にどのような意義を見出しているのか検討し、ライターが街に描く背後にある、存在の証明という性質について論じる。

Ⅴ章では、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ章で提示した情報とフィールドワークで得たデータの分析を通して、作者の悪戯心、芸術的表現、存在の証明という背景から、おっさんシールは一般人に見せることを目的として誕生したと結論付ける。

最後のⅥ章では、本稿の調査結果を総括するとともに、筆者による実体験の不足を本研究の限界と今後の課題として述べる。